

# 論文の和文要旨

論文題目	〈文明化の過程〉と文学のエクリチュール —モリエールからバルザックへ— 第一部：幸福への意志—〈文明化〉のエクリチュール 第二部：ドン・ジュアンの埋葬—モリエール『ドン・ジュアン』における歴史と社会
氏名	水林章

## 提出論文の構成

第一部：『幸福への意志—〈文明化〉のエクリチュール』

第二部：『ドン・ジュアンの埋葬—モリエール『ドン・ジュアン』における歴史と社会』

## I 総論

本論文においてわたしが追求した課題は、主として、フランスにおいて歴史が国家と市民（的経済）社会の二元的編成からなる「近代」の生成に向けて展開した17世紀の絶対主義的宮廷国家の時代から18世紀のいわゆる啓蒙主義の時代にかけての文学的実践の諸形態を検討することによって、この時代に生きた作家たちが、今日ではわたしたちのどれもがもはや決して避けることのできない現実として受け入れている生存の様式に対して、どのような距離と構えを取りえたのかを明らかにすることであった。近代批判は、近代の開始とともに始まる近代的機能のひとつであると思われるが、わたしはそれが初期近代・近世の文学的領野においてどのように展開されたかのかを検討しようと考えたのである。

ノルベルト・エリアスが「文明化の過程」と名付ける歴史の運動は、フランスに限定して言えば、ふたつのとりわけ重要なモメントによって特徴づけられるように思われる。ひとつは、17世紀のルイ14世による絶対主義のもとで成立した「宮廷社会」であり、いまひとつは、19世紀の市民的職業社会にほかならない。このようにして画定された時代をその根底において規定しているのは、あらためて指摘するまでもなく、国家とは区別された平和的な空間としての市民社会を徐々に生み出すところの、市場経済的秩序の出現であり、その不可逆的な展開である。しかしながら、本論の目的は、近代の起源に位置するこの巨大なプロセスの国制史的・社会史的側面それ自体を問題にすることではない。それは何よりもテキストの読みに注意を集中させる批評家ないし文学史家の仕事というよりはむしろ狭義の歴史家に課せられた任務であろう。わたしが試みたことは、より謙虚に、一般に「文学的」という形容詞が冠せられるいくつかのテキストが、「文明化」という歴史

のディナミックの磁力にさらされることによって、逆にそのディナミックに対してどのようにはたらきかけるのかを、テキストの内部にとどまり、テキストを構成している言語的諸要素によって生み出される意味作用に細心の注意を払いながら、つぶさに観察することであった。わたしは、言うなれば、歴史が文学テキストのなかに残す言語的刻印を読み取ろうとしたのである。その意味では、そしてその意味でのみ、本研究におけるわたしの実践は、歴史へのささやかなアプローチでもあると言えるであろう。

モリエール、ディドロ、スデーヌ、ルイ・セバスチアン・メルシエ、ボーマルシェ、ルソー、ゲーテ、オノレ・ド・バルザック。これは、本論において何らかのまとまった考察の対象となった作家たちである。第一級の思想家、小説家もいれば、一般にはあまり重要ではないと考えられている作家もいるが、彼らは、いずれも、おもに古典主義から啓蒙の世紀をへてフランス革命以後の市民的職業社会にいたる時代のある限定された局面を生き、「文学」という特殊な実践をとおして社会的世界の相貌を、時には途方もなく深く、そして時には愛すべき天真爛漫さをもって認識しようとしたという点で共通している。わたしは、これらの作家たちの多様な、そしていかんともしがたい程度の差こそあれ、やはりそれぞれに豊穡な言葉の構築物に触れ、微笑み、驚き、そして少なからず心を動かされた。思うに、わたしが、彼らのテキストを、言葉による実践を、そしてそこに現象する表象のシステムを、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトという、まったく例外的であると同時にしかしある意味では逆に典型的・模範的ともいえるひとりの「芸術家」をいわば同時代的な参照軸として設定しながら、ひとつの比類のない「生きる意欲 *vouloir-vivre*」の痕跡として読むというおおがかりな作業に着手することになった経緯の根底には、彼らのテキストとの生々しい出会いがあったのである。

しかし、それにしても、なにゆえにモーツァルトなのかという疑問がここで提出されるであろうか。フランス18世紀の文学に興味を抱く大方の研究者にとって、モーツァルトの音楽は、分野の違いという高い障壁を超えて、ひそかに思いを馳せる特権的对象であるに違いない。人は18世紀に関心を持つがゆえにモーツァルトを愛するのであるか。いや、真相はその逆ではないだろうか。人はモーツァルトを愛するがゆえに18世紀へと向かわずにはいられなくなるのである。しかし、本研究にモーツァルトの姿が垣間見られるのは、必ずしもわたしの音楽的嗜好からではない。わたしが、とりわけ第一部の『幸福への意志—〈文明化〉のエクリチュール』において、明示的にモーツァルトの参照軸的な役割を強調したのは、アルフレート・アインシュタインが書いているように、コンサートホールに通う市民の登場という新しい状況の予兆に立会いはしたけれども、そのようなプロセスに参画することなく、それゆえ「王の居室とコンサートホールのちょうど中間に位置している」交響曲（晩年の三大交響曲）を書くことになったモーツァルトが、あるいはまた、ノルベルト・エリアスの表現を借りるならば、「社会的に上流の特定依頼者のための芸術制作から芸術家と同じ階層に属している公衆からなる匿名の市場のための芸術制作への発展」という文脈のなかに位置付けられるモーツァルトの仕事が、本研究において考察の対象として取り上げられた作家たちの置かれた時代環境の特質、すなわち封建社会に固有な価値体系からも貨幣と市場によって本質的な規定を受ける市民的経済社会からもとにも隔たっているという中間的・過渡期的特質を、鮮やかに照らし出していると思われたからなのであった。

すでに述べたように、〈文学〉の領野に錨を下ろし、文学テキストをその構成的諸要

素に密着しながら読む姿勢に徹しながらも、〈歴史〉へのひとつのアプローチたらんとする本研究には、17世紀から19世紀にいたる複数の作家の多様なテキストの分析が散りばめられている。しかし、考察の中心を占めているのは、疑いもなく、ジャン＝ジャック・ルソーの小説『ジュリ、あるいは新エロイズ』と、モリエールの『ドン・ジュアン、あるいは石像の宴』である。前者は、ルソー自身の言葉を借りるならば、「世界の真の青年期」としての、もはや自然状態ではないがいまだに社会状態ともいえない、中間の時代をもっともおおがかりに、そして恐らくはもっとも美しく描出した作品として、また後者は、近代の初発の時点に位置しながら、ルソー的な中間の時代をはるかに超えて、近代という圏域それ自体を突き抜ける力を秘めた文字通り怪物的な作品として読み解かれている。

第一部、第二部の概略を次に示そう。

## II 第一部

### 『幸福への意志—〈文明化〉のエクリチュール』

『幸福への意志—〈文明化〉のエクリチュール』は、本書の考察全体を「モーツァルトの時代」という枠組みのなかに収めようとするわたしの意志を表明したプロローグ、エピローグを挟んで、全四部から成り立っている。プロローグでとりわけ重要な点は、「珠玉の」という形容がふさわしい美しいエッセイ「ツェルリーナへのオマージュ」のなかで、テオドール・W・アドルノが《ドン・ジョヴァンニ》に登場する田舎の娘ツェルリーナに与えた「もはや羊飼いの娘ではないが、まだ女性市民ではない」という中間的・過渡期的性格である。本書全体は、ある意味では、最初に提示されるこの小さな「主題」をめぐる生起する規模を異にするいくつもの「変奏」から出来上がっているとんでもないかもしれない。

第一部「もはや…ではない」と「いまだ…ではない」のあいだ—ルソーにおける中間の時代」は、主として『人間不平等起源論』を素材にして、ルソーの思考における「もはや…ではないneplus」と「いまだ…ではないpasencore」というモデルの決定的な重要性について論じている。ルソーが「世界の新しい青年期」と名付ける中間の時代は、エンゲルス＝エリアス的な問題圏としての「文明」に対するきわめてするどい異議申立てにほかならなかった。

第二部「裁きの王の運命—モリエールからディドロへ」では、モリエール『タルチュフ』とディドロの『一家の父』が並行的に論じられている。『タルチュフ』における封建的価値への決別と市民的経済原理の正当化を論じた「古い世界の埋葬」と『一家の父』における父権的なものの表象とその構造を扱った「王殺しの予告」は、一種のクロスリーディングであるが、この試みは、ほとんど一世紀の隔たりを持つ一見何の関係もないふたつの作品を、ブルジョワ的世界の要とも言うべき家長の役割に注目しながら同時に考察するとき、何が見えてくるかという問いに結びついている。ディドロの作品における父のイメージの変容（よき父、情緒的な父としてのドルブッソン）と王権の担い手としての騎士長と警吏に与えられた否定的な処遇は、王＝父を待ちうける運命を示唆しているように思われる。

第三部は、ボーマルシェの『フィガロの結婚』論に当てられている。とかくフランス革命の文脈のなかで、まるで革命を準備した思想的張本人のごとくに論じられることの多いこの作品を、わたしは意識的に革命から切り離し、「文明化の過程」との関係において読み解こうと試みた。一方ではモリエールの『ル・ミザントロープ』におけるアルセストの反文明的な立場との明示的なつながりによって、また他方では、自伝的物語の主体としてのフィガロの中間的性格（もはや単なる下僕ではないが、いまだに近代小説の若きヒーローになりえていないという意味での中間性）と、もはや子供ではないが、しかしいまだに大人ではないシェリュバンのそれをとおして、『フィガロの結婚』の表象世界がもはや到底「特権者の世界」ではないけれども、いまだに「93年のセクシオン活動家たちの世界」でもない、いわば「世界の真の青年期」というユートピアに通じるものであることが示されている。

もっとも多くページ数が割かれている第四部は、ルソーの小説『ジュリ、あるいは新エロイズ』の歴史社会学的な読解である。わたしは、書簡体小説の歴史性に触れたあとで、テクストを形成している諸要素の意味作用の詳細な検討をとおして、パリから遠く離れたアルプスの麓の小都市に位置付けられた表象世界が、一方では、伝統的なオイコス的世界でありながらももはや中世的・封建的所領ではありえず、むしろそこからの脱出を試みつつある多少とも産業的な世界であるということ、しかしまた他方では、それが、あくまでもオイコスの範疇に属するものであり、いまだに国家から分離した経済社会としての市民社会のなかにはとりこまれていないということを示した。

エピローグで論じたのは、『ジュリ』によって構築された幸福な世界の崩壊である。すでに『ジュリ』の結末が明示的に予告しているその崩壊を、わたしは『ジュリ』への応答として書かれたゲーテの『若きヴェルテルの悩み』とバルザックの『三十女』の解読を通じて跡付けようとした。こうして『幸福への意志』は、17世紀の絶対主義王制の時代から19世紀初頭の本格的な市民的経済社会の時代への移行の歴史の一断面を、その文学的鉅脈の掘り起こしによって記述しようとしたのである。

## II 第二部

### 『ドン・ジュアンの埋葬—モリエール『ドン・ジュアン』における歴史と社会』

本研究の第二部は、モリエールの『ドン・ジュアン、あるいは石像の宴』を唯一の対象とした一個の独立した論考として構想されてはいるものの、『幸福への意志』を閉じる最後の数行に付された巨大な注ないし補論という性格を併せ持っている。

『ドン・ジュアンの埋葬』は、現代のポストモダンの状況への一瞥によって始まっている。近代家族に起こった根源的な変容をナポレオン民法典の解体＝再編成との関係において論じることで、現代を自由な欲望主体に根ざした真の個人主義の時代として位置付けることがその目的であった。17世紀の絶対王制の時代に書かれたテクストを論じるにあたって、現代への迂回が要請されたのは、分析対象が、『タルチュフ』の場合と同じように、古い封建的世界を埋葬し新たな市民的経済原理を正当化するというイデオロギイ的機能を果たすと同時に、市場に固有の「全面的交換」の論理の徹底化にかかわる表象を内包していると思われたからである。

『ドン・ジュアン』の表象世界は、宗教、経済、政治という三つの水準で分析された。登場人物の例外的な多様性、驚くべき文体的手法と象徴作用が作品に豊穡な社会性 *socialité* を付与しているように思われたからである。まず、宗教的な観点から見れば「悪魔」にほかならないドン・ジュアンは、経済的な範疇においては、「貨幣」として、すなわち伝統的なオイコス秩序における贈答的・相互的義務関係の破壊者として立ち現れる。実際、広大な空間を自由に移動し、女という女を一種の商品に変容せしめるドン・ジュアンは、「貨幣」の機能を担っているのである。また、政治的な水準に目を転じれば、独身を選び、父に似ることを拒否し、父から息子へと連綿と続く家の伝統を否定するドン・ジュアンは、父殺しの実行者であり、家父長制の破壊者として位置付けることが可能である。

神・王権・家父の三位一体性に依拠する父の体制に異を唱えるドン・ジュアンは、最後には、父権的なものの象徴としての石像によって罰せられる。しかし、ドン・ジュアンに科された極刑は、ドン・ジュアン化しつつある社会がそのうしろめたさを払拭し、新たな時代への移行を受け入れるための荘厳な儀式なのであった。全面的な交換の極限状態へと突き進む力を秘めた市場的交換という新たな事態を前にして、底知れぬ不安に襲われた社会は、その不安にドン・ジュアンという形と名前を与え、手なづけようとしたのである。しかし、社会のだれもが自由な欲望主体となった今日、神話的形象としての〈ドン・ジュアン〉の存在価値は失われようとしている。われわれは、〈ドン・ジュアン〉の埋葬に参列していると言えるだろう。